
われはゴーレム 2

支援BIS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

われはゴーレム 2

【Nコード】

N2032Y

【作者名】

支援BIS

【あらすじ】

長い孤独の時を生きるゴーレムの、その後の物語。前後編合わせで約1万4千字。迷宮の王の-spinオフですが、本編と関係なく、独立した短編としてお読みいただけます。少女と村人の危機に、石の神像が立ち上がり悪者と戦うという、単純ですっきりとした短編です。

1

「管理指令第103号が発動されます。

条件が満たされましたので、管理指令第103号が発動されます。分岐迷宮内のすべてのかたは、すみやかに分岐迷宮外に待避してください。

分岐迷宮内のすべてのかたは、すみやかに分岐迷宮外に待避してください。

なお、あらかじめ登録された管理者は、設定された地点に転送されます。

あらかじめ登録された管理者は、設定された地点に転送されます」

2

警告音とともに、アナウンスが流れた。

ふむ。

管理指令103号とは、何であったかな。

ああ、そうか。

「こちら側」の空間を土砂で埋め尽くし、活動が停止されるのだな。

え？

そのとき、地響きとともに迷宮の天井が崩れてきた。

この迷宮は、今、地の底に沈もうとしている。

私は、あるじと奥方様の柩を守ってきた。

千五百年以上にわたり。

その役目が、今、終わるのだ。

私は、目を閉じて、最後の時を迎えようとした。
できなかつた。

よく考えたら、私には、まぶたがない。

私は、ストーンゴーレムなのだから。

記憶の消去を開始する。

万一、よからぬ者に私の記憶を利用されることがあれば、あるじ
の名誉を辱めることになる。

記憶と力を失い、私は土くれに還る。

モンスターにも、死後の世界はあるのだろうか。

2

どこだ、ここは？

土砂が降り注いできたかと思うと、私は見知らぬ場所に転送され
た。

山々と森に囲まれた湖のほとりである。

記憶消去プロセスを停止する。

人間であれば、のどかな場所、と呼ぶであろう。

風光明媚、といった表現が、いかにも似合う景観である。

多様な木々の色合いと形が、とても美しい。

どうして、私は、ここに来たのか。

ふむ。

先ほどのアナウンスで、あらかじめ登録された管理者は、設定された地点に転送される、と言っていた。

私は、迷宮管理者である。

設定された地点がここなのであろう。

誰が設定したのか。

あるじである、と考えるのが論理的であろう。

さてよ。

この場所には、何となく見覚えがある。

山々のかたち、連なりかた。

私は、この場所を知っている気がする。

だが、記憶領域に検索をかけても、7割以上の適合を示す地形がヒットしない。

何だろう。

何か大切な思い出が。

思い出すべきことがあったような気がするのに。

さて、それにしても。

私はこれから何をすればよいのだろうか。

うむ。

何もすることがない。

では、このままここで座っていよう。

見事な自然を眺めながら。

3

森からウサギが飛びだしてきた。
ウサギは、私の足に激突して、気絶してしまった。
続いて少女が飛びだしてきた。
ウサギを追ってきたのであろう。

ひっくり返っているウサギと私を見て、少女は目を丸くした。
ツタでウサギの足をくくると、何を思ったか、私の足の上に置いた。

私は、二本の足をそろえて伸ばし、両手のひらを地につけて座っている。

その足のなかほどに、ウサギを安置したのである。
そして、少女は、私の正面に回り込むと、膝を突き、両手を重ねて心臓に当て、深く頭を下げて私を拝んだ。

これは、西の辺境で、神霊を拝礼する作法として古くから行われているものである。

天文観測と地磁気測定によって確認した位置情報でも、ここは西の辺境であると判断された。

やはり、ここは西の辺境なのだ。

西の辺境。

私は過去に、確かにここに来た。

そのとき、何があったのだったか。
それを思い出せれば、私がこの地で何をすべきかも分かるのだら
うか。

4

それからというもの、少女は頻繁にやって来た。
私は身動きせずに座っているから、身には土が積もり、草や苔も
生える。

少女は、それをかき取り、時には水を掛けて洗ってくれる。
私は、湖に向かって座っている。
湖の水面は、変化に富んで美しい。
そこに映る山々も、季節と時間帯により異なる風景を見せる。
その景色の中で、ちょこちょこ動き回る少女を眺めるのは、と
ても楽しいことである。

掃除を終えると、少女は私に拝礼し、話し掛ける。
家族のこと、村のこと、自分の楽しみのことなど。
そして、私に祈願をする。
誰それは病気なので、早く治りますように。
誰その家では食べ物がないので、狩りの獲物が多くなりま
すように。
誰その息子は出稼ぎに出て連絡がないけど、どうぞ無事であり
ますように。

いつしか私は、村の事情に詳しくなった。

話すことが尽きると、少女は私の伸ばした足の上に、ちょこんと座る。

始めは恐る恐るだったが、次第に慣れてきて、やがては寝そべったり、ぐったり突っ伏したりもするようになった。

私の足は寝心地がよい、と少女は言う。

ふふふ。

私の足の寝心地を賞めるといふことは、すなわち、わが造物主の偉大さを贅えることである。

さあ、いくらでも寝るがよい。

そして、私の足の寝心地良さを、骨の髄まで思い知るがよい。

少女はすすくと成長していった。

子どもの成長は、早いものだ。

5

少女の悲鳴が聞こえる。

私は少女の位置を確認し、センサーで周囲を探った。

む、ロルだな。

人間が食用に珍重する獣だ。

少女は、勝手知ったる森を器用に駆けている。

ロルは、平坦な地形であれば、なかなか速く走るが、少々鈍重で方向転換が苦手である。

少女は、うまく逃げ切るだろう。

森から少女が現れた。
私のほうに走ってくる。
ロルが追いかけてくる。

少女は、私の横を駆け抜けて、私の後ろに隠れようとした。
その右足に、えぐられたような傷があり、血が流れているのが見えた。

このケダモノのせいだ。

ロルが私の横を走り抜けて、少女に襲い掛かるうとする。
私は、右手を振って、ロルの頭部をはたいた。
ロルは、短く悲鳴を上げて、死んだ。

「えっ？

えっ？

えっ？

い、今、石の神様、動いたよね？
動いたよねっ？」

私は答えない。

意地悪をしているわけではない。

私には、発声器官が備わっていないのだ。

「確かに動いたよっ？

右手ではあーんって。

ねえ、石の神様？

かみさまってばっ」

ロルの成獣がまるまる一頭。

少女の村にとっては大変なごちそうである。
少女は、大人を連れてきて、口ルを持って帰るだろう。
今夜の村は、宴会になるかもしれない。
塩漬けにされた肉は、冬のあいだの貴重な食料になるだろう。

「何かお返事してよ〜〜っ」

6

「石神様、石神様。
大変なの」

む、どうした？

ゴルム爺さんの年取った狩猟犬が、ついに息を引き取ったかね？
「ヤークのお父さんのデランさんが、昨日迷宮に入って、夜が明け
ても帰って来ないの」

なんと、デランが帰って来ないのか。

少女がいう迷宮とは、村の近くにある、七階層までしかない小さな小さな迷宮で、モンスターも弱いかわり、得られるドロップ品も大したことはない。

それでも、元兵士だったデランにとっては、自分の実力にあった稼ぎ場である。

一日おきぐらいで迷宮に入っては、一家五人が食べるのに十分な品を得ている。

デランは、一日以上迷宮にこもることはない。
翌日になっても出て来ないとなると、何かよくないことが起きた
と考えられる。

なるほど。

少女が、息を切らせ、擦り傷を作って駆け付けた理由が分かった。

「ヤークは、自分が迷宮に入って見て来るって言って聞かないの」

それは無謀というものだよ。

ヤークは、まだ八歳にすぎない。

体力も勇気も乏しい。

いつも君に泣かされているではないか。

第一階層の牙鼠でさえ、ヤークには強敵だ。

第一、迷宮の第二階層以下に入るためには、騎士や冒険者などの
恩寵職が必要だよ。

ある時期からそうなったのだ。

「アンドルさんとボルカさんが助けに行こうとしたんだけど、駄目
だったの。」

村で迷宮に入れるのは、デランさんだけなんだって」

迷宮の位置は知っている。

私は、迷宮にアクセスした。

管理者権限を発動し、手動制御モードにする。

私は迷宮管理者である。

亡きあるじに次ぐ管理者権限を持っている。

この大陸で、私に干渉不可能な迷宮は、数少ないはずである。

「だから、神様、お願い。

デランさんを助けてっ」

迷宮内の人間をサーチした。

第七階層だ。

かなりの数のモンスターに囲まれている。

この階のモンスターは、ゴブリンだ。

一時的に、ゴブリンを非アクティブに設定する。

しかし、ゴブリンはすでに高いヘイト状態にあるらしく、散っていくようにしない。

「あたし、石の神様をお願いしてくるって、ヤークや、村のみんなに言ったの。

石の神様は、みんなを見守ってくれてるって、いつも言ってるんだから」

このままでは詳しい情報が得にくいので、ゴブリンの一匹に憑依する。

ゴブリンの目を通して現場を見て、状況を理解した。

あれがデランだな。

岩壁の陰に隠れ、盾をうまく使って、何とかゴブリンたちの攻撃をしのいでいる。

すぐ後ろが第六階層への階段である。

そこに飛び込めば、ゴブリンたちは、追うことができない。

だが、飛び出せば集中攻撃を受けるだろう。

あ、デランがころんだ。

「うっん。

見守ってくれてるだけじゃない。

いざとなつたら、動き出して、強い力で助けてくれるの。
あたしが野良ロルに襲われたときも、そうだった。
あのときは、村中で石の神様にお礼の祈禱をしたのよ」

デランに攻撃を仕掛けたゴブリンを、憑依したゴブリンで攻撃する。

背中に傷を受けたゴブリンは、怒りの表情で振り返り、反撃してきた。

私の憑依したゴブリンは、頭蓋骨を割られて倒れた。

よし。

ほかのゴブリンたちも、この異常な事態に注意を向けている。
デランも、信じがたいものを見る目で、こちらを見ている。

私は、この階のモンスターのリポップを一時停止すると、次のゴブリンに憑依した。

そして、デランに近いゴブリンを攻撃した。

一匹を倒したが、周りのゴブリンたちの集中攻撃を受けて倒れた。
あとは、これを繰り返せばよい。

「石の神様は強いもんね。

どんなモンスターより強いもんね。

あたし、信じてる」

最後に生き残ったゴブリンに憑依すると、デランをよく見た。
ひどい傷を負っている。

動くこともできないようだ。

だが幸いにも、このゴブリンはポーションをドロップする。

私は、周りに落ちているポーションをかき集めると、デランの近くに置いた。

迷宮の中で人間が赤ポーションを服用すれば、どんなひどい傷も

たちどころに治る。

「デランさんを助けて。
お願い」

じゅうぶん遠い場所に移動してから、憑依を解除した。

「あ。

か、神様。

神様の胸が、ちかちかかって光ってる。

聞いてくれたのねっ。

あたしのお願い、聞いてくれたんでしょっ？」

何が起きたのか確認するため、記録を調べてみよう。

「ああっ。

もう一度光った。

大丈夫なんだよね？

デランさんは、大丈夫なんだよね？」

なんと、七階層にはボスがいたのか。

しかも、ゴブリンキング。

倒されて、白銀の短剣をドロップしている。

よくも一人で倒したものだ。

そうか。

分かった。

デランの上の娘は、来月結婚する。

娘の門出を祝うのに、お金が欲しかったのだな。

相当に時間をかけて、何とか倒したのだろう。

「ありがとう、神様。

ほんとにありがとう、石の神様」

うおっ。

な、泣いているのか？

泣いているんだな。

そ、それは、涙だな？

泣くな。

私の足に涙をこぼすな。

私は、その液体が苦手なのだ。

7

「ゲイラよ。

こんな山深くの村一つをつぶすことで、そなたの言うような効果があるものか、いささか疑問に思えてきたぞ」

「子爵様。

あの村は、特別なのです。

山自体が、神霊の加護を受けた聖地であると、古い言い伝えにあります。

近隣の平民どもは、そのことをよく知っており、あの村の者が町で買物をするときには、まがい物売りつけない取り決めがあるほどなのです。

ご領主様の徴兵令に逆らったため、あの村が皆殺しの目に遭った

と聞けば、他地区の平民どもは、無茶な徴兵にも素直に従うようになるでしょう」

「これ。」

無茶な徴兵とは何か。

物言いに気をつけよ」

「は。」

これはご無礼をいたしました。

しかし、農村と山間部の男共を根こそぎ兵士に取り、使い捨てにするのですからな。

「ご領主様のお心を知ったら、領民どもは驚きましよう」

「ははは。」

千載一遇の機会なのだ。

伯爵は、異人たちとの大戦で、精鋭をことごとく失った。

わが男爵家には、密かに養い育ててきた強大な魔術師軍団がある。

魔術師軍団が、伯爵と一族を城ごと焼き滅ぼせば、あの豊かな土地が兄上の物になる。

国も今は混乱のさなかにある。

兄上の領有権を認めるほかあるまいよ。

だが、魔術師軍団が攻撃できる位置まで近づくのを、相手も黙って見ているわけはないからな。

盾が要る。

人間という盾が。

農民や獵師や木こりは、体だけは頑丈だからな。

盾にするにはもってこいだ。

なに、一度だけ使えればよいのだ。

旧領の村すべてが滅びても、何の問題もない」

「村々には、女ばかりが残りますな」

「うむ。」

無駄にしてはもったいない。

新領土に引きずってゆき、兵士たちの慰みものとする。

やがて生まれる子どもらは、労働力の足しになるう」

「ははっ。」

それにしても、魔術師頭のポルリ力殿は、やる気まんまんですな。

何も魔法使い全員を連れて来ずともよかったでしょうに。

遠征費用もばかになりません」

「そう言うな。」

初めて実戦で心置きなく力を振るえるのだ。

気持ちも高ぶろう。

魔法使いたちに実地経験を積ませることは、必要なことなのだ」

「それはそうですな。」

反撃の心配がまったくない状態で、ただ平民どもに魔法を打ち込めばよいのですから。

人を殺すことに慣れておかねば、伯爵領を攻める際、どんなしくじりをしないと限りませんからな」

「やるからには、きちんとやるよう伝えよ。」

殺し尽くすのだ。

いや。

噂を伝える者二人か三人は、逃がしたほうがよいか。

兵士どもには、護衛に撤するよう、よく言い聞かせておけ。

血に狂って村に飛び込めば、魔法に撃たれてしまおうとな」

「ははっ」

7

「デランよ。」

急に皆を集めて、どうしたんじゃ」

「むいおん村長。」

説明もせず、こんなことをして、済まない。

だが、一大事なんだ。

みんなも聞いてくれ！

領主様の兵が、この村に向かっている。

俺たちを皆殺しにするつもりなんだ」

「デ、デラン。」

それは、本当か？」

「ああ、おさ長。」

本当だとも。

領主様の軍にいる友達が、こっそり教えてくれたんだ。

この前の徴兵令に逆らった、というのが理由だそうだ」

「五歳以上の男すべてを半年間無給で領主様に差し出すなど、できるわけがない！

しかも兵役じゃ。

けがもすれば、死にもする。

こんな無茶な話はありませんわ。
出せる範囲で男を出す予定なんじゃ。
そしてお届けしてあるんじゃないぞ？」

「はなから命令拒否を理由にするつもりで、絶対に従えない条件を出してきてるんだ。

とにかく、急いで逃げなくちゃならん」

「に、逃げるというても、どこへ逃げる？」

「人里のほうに向かったんじゃない、すぐに見つかる。

山奥に行く。

湖の近くがいい。

石の神様の所だ。

水も、木の実もあるし、魚も穫れる」

8

「ゲイラよ。

では、村人は、その山奥の湖とやらにいるというのか」

「は、子爵様。

ポルリカ殿の使い魔が発見いたしました。

山の中に逃げれば見つからない、と考えたのでしょつな」

「実際、丸一日を無駄にしたわ。

そのうえ、道もろくにならない山道を進まねばならんのか」

「太古に神竜が作った湖といわれておりまして、普段は誰も近づかないはずなのですが」

「ふん。」

いまましい虫けらどもが。

帰着の日が遅れるぶんだけ、わしが兄上から叱責をくらうわ！
このたびのことには、わが男爵家のすべてが懸かっておるのだ。
急ぎ出発するぞ。

一人残らず細切れにしてやらねば気が済まんわっ」

9

人間というものは、騒がしいものだ。

昨日ここに来たときには、びくびくした感じだったのに。

今は、ぺちやくちゃ話したり、魚を釣ったり、木の実を取ったり。
まったく遠慮というものがない。

美しかった波打ち際は、すっかり踏み荒らされている。

村人たちが最初にしたことは、私を全員で拝礼することだった。

自分が神霊になったような錯覚を覚えた。

今もなぜか、私を取り囲むようにしている。

村長は、ご丁寧にも、「石の神様から、あんまり離れるんじゃないぞ」などと村人に注意している。

「来たつ。」

来たぞー！ー！。

「ご領主様の兵が、南から来たあー！ー」

「おおお、こんな所まで追って来たのか。

デラン、皆を集めてくれっ」

「うむ。」

みんなー！

集まれー！ー！

打ち合わせどおり、東に逃げるぞー！」

「だつ、だめだー！

東からも、馬に乗った兵隊が来てるぞー！ー！」

「なにっ？

よしっ。

じゃあ、西だ。

西へ逃げる。

荷物に構うなっ。

森に出た者は、そのまま散り散りに逃げることになってる。

おれたちは、西に逃げるぞー」

「デランー！ーっ。

に、西からも、馬に乗った兵隊が来るー！ー！ー！」

「えええっ？

馬鹿なっ。

こんな田舎の村ーっ懲罰するのに、どれだけ兵を連れて来てるんだ？

しばらく隠れてれば、諦めて引き返すと思ったのに」

ふむ。

ずいぶん大勢の兵士がやって来る。

うまく村人たちを追い立てている。

村人は、しぜん、一箇所に固まる。

私の周りに。

「石の神様！

助けて。

村の人たちを助けてください！

お願い」

少女が私の前にひざまずく。

「石の神様！

お助けください。

お願いします」

「神様」

「石の神様」

村人が、次々に私に平伏していく。

私に助けを求めている。

そのとき、私の記憶領域で、懐かしい声が再生された。

「ヴォーグ。

ヴォーグ。

人には優しくしなさい。

困っている人間がいて、お前が助けてあげられるなら、その手を貸してあげなさい」

そうだ。

たしかに、わがあるじは、そうおっしやった。

私は、周囲を見た。

不安そうに寄り添い固まる人々。

ある者は泣き、ある者は呆然とし、ある者は怒りをあらわにしている。

領主によって殺されるという理不尽の前に、なすすべのない村人たち。

この者たちは、助けを必要としている。

そして私には、この者たちを助ける力がある。

何年ぶりかで、私は立ち上がった。

後編

10

「魔術師頭殿。

あれは、何だ」

「うづむ。

石像かと思つたが、ゴーレムのようじゃの。

サンドゴーレムのように見えるが、ストーンゴーレムかもしれん」

「なんだ。

分からののか」

「子爵様。

ポルリカ殿は、かのマズルー魔道研究所で研究員を務められたお
かた。

大陸でも有数の魔法使いと申してよろしいかと。

そのポルリカ殿がはつきり判別できないということは、あのゴー
レムとやらが、いささかイレギュラーなのでしょう」

「手強いものである可能性もある、ということか」

「いやいや。

しよせんゴーレムじゃからの。

硬いだけじゃ。

力はあるかもしれんが、遠距離攻撃はできぬから、間合いを取っ
て攻撃すればよいだけのこと。

こちらは軍勢。

どうとでもなる。

メタル系の、それこそミスリルゴーレムであれば、破壊に時間がかかるが、それでもまあ何とかなるじゃろう。

まして、砂や岩のゴーレムなど、さして恐れることもない。

じゃが、よい機会じゃから、お教えしよう。

子爵殿。

ああいうものを相手にするときは、防御の高い兵士数名でおびき寄せ、足止めをしての。

そして、操っている者を倒すのじゃ。

この場合、村人を皆殺しにすれば事足りる。

それが手堅いやり方というものじゃ」

11

立ち上がって、まず私がしたことは、敵の戦力分析である。

ふむ。

魔法使いが多いな。

しかも、一人からは、そこそこ大きな魔力が感知される。

私は、防御障壁生成の術式を記憶領域から呼び出し、対魔法防御と対物理防御を八対二の比率に調整して、左腕を発動体に設定した。そして、左腕を取り外し、地面に置いた。

すたすたと、敵のほうに歩いていく。

村人が、私に畏敬の視線を浴びせながら、道を開けてくれる。

村人からじゆうぶんな距離を置いて、発動キユーを与える。
左腕を中心に、青白く輝くドーム型の障壁が形成された。
村人全員を、すっぽり覆っている。
しばらくのあいだ、このドームは、村人を魔法攻撃からも物理攻撃からも守ってくれる。

12

「やはり、魔法使いがおるのう。
どこからまぎれ込んだんじゃろうかのう。
一人であれだけの大きさの障壁を張ったとすれば、なかなかじゃ。
時間を掛けて準備したんじゃろうなあ。
発動の瞬間、魔力はわずかしか感じなんだ。
魔力が弱いのか、変換効率が高いのか」

「楽しそうだな、魔術師頭殿」

「子爵殿。

これは、この魔術師軍団にとり、よいことじゃ。
相手に魔術師がおるとなれば、なぶり殺しではなく、戦闘じゃからの。

士気も上がるし、勝利の満足も味わえる」

「なるほど。

手間を掛けさせられただけのことはあるわけか。

さて、どう攻めればよい？」

「まずは、あの魔法障壁の性質を調べたいのう。
槍か剣で斬りつけさせてみてもらいたい。
障壁に突っ込まぬよう、注意しての」

「分かった。

ゲイラ。

騎馬兵を二人出せ」

「はっ」

12

私は、障壁の前に立ち止まって、軍勢に相對している。
殺さない程度に痛めつけて帰らせるのがよかるう。

馬に乗った兵士が二人進み出て、私を迂回^{うかい}してドームに接近した。
かたや槍で、かたや剣で、障壁に斬りつけている。

せつかくの武器が傷つくから、やめなさい、それ。

そう言ってあげたかったが、あいにく私には口がなかった。
しばらくして、二人の兵士は指揮官の元に引き返した。

「なんとのう。」

対物理障壁じゃったか。

この魔術師軍団を前に、ちぐはぐなことじゃ。

まあ、魔法というものは、適性によって習得できる術が限られるから、致し方ないことではあるがのう」

「魔術師頭殿。

分かるように説明してくれ」

「あの青白い壁は、剣や槍ははね返すし、報告からすると、かなりの強度じゃ。

しかし、魔法の壁というものは、剣に強ければ魔法に弱く、魔法に強ければ剣に弱い。

どちらか一方の性質しか持たせられんものなのじゃ。

つまり、あの壁は、魔法攻撃を防げない、というわけじゃな。

一気に魔法攻撃をたたき込めば、この討伐は終了じゃ」

「ゴーレムは、どうする」

「放っておいてはどうかの。」

ただし、村人に魔法攻撃を仕掛けると、ゴーレムは、こちらに突っ込んでくるかもしれん。

そのときの守りは、よろしくお願いしたいところじゃ」

「うむ、わかった。

む？

ゲイラ、何か言いたそうな顔だな」

「は。

恐れ入りますが、兵士たちにも戦闘訓練をさせたいと思います。
あのゴーレムには、剣や槍は効くのですね？」

「もちろん効くとも、ゲイラ殿。

じゃが、刃物では、刃が欠けることもある。

できれば槌や棍棒でたたくのがよい。

それと、人間と違って、ゴーレムは痛みを感じないからの。

傷を受けてもひるんだりはせん。

その代わり、ある程度ダメージがたまると、突然動かなくなるの

じゃ」

「分かりました。

子爵様、しばし兵にゴーレムを攻撃させたいと思います。

被害が出るようなら、すぐに中止いたします。

お許しただけですか」

「許す。

やれ」

12

少女は、青い壁にぎりぎりまで近づき、目の前で起きてくることを、その眼に収めていた。

すべては夢のような出来事である。

護ってくれるはずの領主が、村の民を殺しにやって来るといってランの話も。

村の皆で、湖のほとりに逃げて来たことも。

耳で聞き、頭で理解しても、体を動かして歩いても、ひどく現実感のないことに思えた。

本当に領主の軍勢はやって来た。

こんな山の中に、立派な装備をした兵士たちが、自分たちを殺しにやって来た。

だが、その次に起きたことこそは、あらゆる意味で最も現実離れしていた。

石の神様が立ち上がったのである。

少女と村人を護るために。

やっぱり、あの日、右手を動かしてロルを仕留めてくれたのも、見間違いではなかった。

石の神様は、やっぱりただの石なんかではなかった。

石の神様は、左手を体から切り離して地に置いた。

左手からは、不思議な力があふれ出て、少女と村人を保護する青い壁が出来た。

そして、石の神様は、青い壁の外に、独り立っている。

少女と村人を護るために。

これから何が起きるのだろう。

怖かった。

だけど、それを自分の目で見届けなくてはならない、と少女は思

った。

誰かが隣に来た。

少女の手を握った。

この手は、幼なじみのリットだ。

強く握り返した。

リットの手は、暖かく、力強かった。

馬に乗った兵士が二人駆けて来た。

馬とは、こんなに大きいものなのか。

兵士とは、こんなに恐ろしいものなのか。

二人の兵士は、少女から百歩ほど離れた位置で、青い壁の間際に近づいた。

そして、馬に乗ったまま、青い壁に、剣で斬りつけ、槍で突きかかった。

少女は、壁が壊れてしまつかと恐れたが、何度打撃を受けても、壁はびくともしななかった。

二人の兵士は引き上げた。

しばらくして、もっと恐ろしいことが起きた。

何十人か、数えきれないほどの兵士がやって来て、石の神様を攻撃しはじめたのだ。

槌で。

棍棒で。

剣で。

槍で。

盾で。

すさまじい音がした。

兵士たちの挙げる威嚇の声に、心臓が凍るかと思った。

こんなに攻撃され続けたら。

石の神様は死んでしまう。

やがて、兵士たちに取り囲まれ、石の神様の姿は見えなくなった。恐ろしい物音だけが、攻撃が続いていることを示している。

「石の神様は、反撃しようとしないな」

突然、声がして、びくつとした。

それは、デランの声だった。

「どうして反撃しないんだろうか。

あの右手を一振りするだけで、何人も兵士が吹っ飛ぶだろうに」

デランは、迷宮で奇跡的に助かったあと、少女から石の神様のおかげだといわれ、湖に来て石の神様に感謝の祈りを捧げた。

人知を超えた力に守られた、という強い実感があつたため、少女の話を素直に受け入れたのだ。

村人をここに導いたのも、もしかしたら石の神様が助けてくれるかもしれない、という淡い期待がデランの胸にあつたからである。

「石の神様は、まったく動かないな。

びくりともしない」

あんな大勢の兵士に囲まれているのに、デランには戦闘の様子が見えているらしい。

「あの軍勢の中には、俺の友達が何人かいる。
俺は、石の神様にそう言った。
もしかして、そのせいで石の神様は攻撃できないのか？」

デランが独り言のように、そう口にしたとき、少女は思わず言い返した。

「ちがうよ。」

石の神様は、がまんしてるんだよ。

これで兵士さんたちが引き上げるなら、何もしないつもりなんだよ。

でも、がまんして、がまんして、それでも領主様があたしたちを殺そうとするなら」

なぜ、こんなことを思うのか。

言えるのか。

少女は自分で不思議に思った。

しかし、その言葉の正しさに、ひとかけの疑問も持たず、少女は言い切った。

「石の神様は、あいつらをやっつける」

13

「魔術師頭殿。」

ゴーレムというものは、これほどまでに硬いものなのか」

子爵は苦々しい顔で、だらしなくへたり込む兵士たちを見下ろしている。

全力でゴーレムを攻撃し続けた体の疲れもさることながら、自分たちの攻撃が相手に傷一つ付けられなかった事実が、彼らを打ちのめしていた。

「うつつむ。

わしは勘違いをしていたようじゃ。

あれは、現代の魔法使いに生み出されたものではない。

神々や神霊によって生み出されたものなのじゃろう。

太古の遺物。

……いや。

ことによると、あのゴーレム自身が」

「子爵様。

ぶざまな結果となり、申し訳もございません。

このままでは、兵士たちは心の強さを失ってしまいます。

どうか、私めに出撃のお許しを」

ゲイラは、そう言って、腰の魔剣に手を掛けた。

ゲイラが、男爵家の親衛隊長の座にあるのは、誰よりも剣の腕が立つからである。

先代男爵は、男爵家の家宝である魔剣を、ゲイラに貸し与えた。

岩をも切り裂く、極めて強力な恩寵を持つ剣である。

この剣を持つゆえに、ゲイラは、特に許されなければ出撃できない。

「うつつむ。

ここはゲイラに出てもらおうよりあるまい。
あの怪物を斬り捨ててまいれっ」

「御意っ」

ゲイラは、愛馬を駆り、ゴーレムに突進した。

すらりと抜き放った魔剣が、突如、黄金の燐光をまとった。

クリティカル・インパクト

いかなる盾も鎧も断ち切る斬撃であり、日に三度しか使えない、
魔剣の特殊攻撃である。

沈みかけた夕日を浴び、大きく魔剣を振りかぶって石の怪物に挑みかかるその姿を、すべての兵士と村人が見守った。

馬は見る間にゴーレムにたどりつき、魔剣がゴーレムの太い首筋に斜め上からたたき付けられ。

パッキーーーーーン。

真っ二つに折れた。

13

「子爵様。

召還獣を使用いたしませんぞ」

さすがの子爵も、この言葉には、すぐに許しを与えることができ

なかった。

魔法使いポルリカは、八人の弟子を率いて男爵家に迎えられた。その八人が八人とも、強力な召還獣を使役する。

そもそもは、この召還獣が、兄である当代男爵の野心に火を付けたのである。

その存在は徹底して秘密にされた。

だが、できれば、実戦で使う前に一度見ておきたくはある。

この山奥なら人に見られる心配もない。

そもそも、魔術師軍団は、魔術師頭であるポルリカの裁量下にある。

子爵は、無言により諾意を示した。

ポルリカは、弟子八人に命じて魔獣の召還を行わせた。

空に八つの巨大な魔法陣が浮かび上がる。

色とりどりの奇怪な文様が形作られ、生き物のように成長しながらうごめく。

そして、文様が一定の軌道を描き終えたとき。

そこには、八体のレッド・ワイバーンが、翼をはためかせていた。

レッド・ワイバーンは小型の飛竜であるが、内臓を体の外側に貼り付けたような不気味な外見をしている。

外皮は驚くほど強靱である。

飛行速度は、あまり速くない。

この魔獣は、恐るべき魔法攻撃を行う。

口から吐く火炎弾である。

レッド・ワイバーンの火炎弾は、王城の城門をもはじき飛ばす。

八体が同時に火炎弾を放つとなれば、その威力は想像することも難しい。

八体のレッド・ワイバーンは、村人たちを守る障壁の上空から、次々に火炎弾を吹き付けた。

その一撃ごとが、巨大な火柱を上げる。

離れて見守る軍勢にまで、熱と音の余波が伝わり、兵士たちに、村人たちが今まさに地獄にいることを教えた。

目を焼き耳をつんざく破壊のシンフォニーは、この世の終わりを思わせた。

轟音と閃光が収まったとき。

そこには、何事もなかったかのように静かな光を放つ障壁があった。

村人の誰一人として傷を受けてはいない。

障壁は、村人を守りきったのである。

「ば、馬鹿なつ。

何ということじゃ！

では、あれは、対魔法防御も兼ねているというのか？

対魔法防御と対物理防御が同時に可能な障壁など、聞いたこともないわつ。

い、いや。

仮にあれが、対魔法障壁であつたとしてもじゃ。

レッド・ワイバーン八体じゃぞつ。

レッド・ワイバーン八体の吐く火炎弾を防ぎきるなど、あり得ん。いったい、わしらが相手にしておるのは、何者なのじゃ？」

長い年月をかけて培った知識と力への自負を揺るがされ、かく然とする老魔法使いの視界の端に、ゴーレムが右手を虚空に向けて伸ばすのが映った。

空に出現した八体のモンスターが、火の玉を障壁に吹き付けた。
ふむ。

あのモンスターたちを退けたら、軍勢は引き下がってくれるかも
しれない。

殺すのは、かわいそうだ。

あのモンスターたちは、主人の命を懸命に果たそうとしているだ
けなのだ。

私と同じではないか。

あれらを殺すことなど、私にはできない。

軽くなでてあげよう。

八匹のモンスターたちは、自軍のほうに帰ろうとしていた。

私は、右手をモンスターたちに向け、気絶させる程度の威力に絞
って、衝撃波を放った。

八匹の飛行モンスターたちは、粉々にすりつぶされ、その血肉が
敵軍の兵士たちの上に降り注いだ。

あれ？

おかしいな、と思って記憶を確かめたら、この威力設定はヒュド
ラなどの大型で強靱な魔獣を気絶させる数字であった。

勘違いである。

この百分の一程度の出力でよかったのだ。
記憶消去のプロセスのため、情報と情報の関連づけが妙なことに
なっているようだ。

まあ、済んでしまったことはしかたがない。
うむ。

15

「い、今の魔法は何だった？」

ポリリカ！

今の魔法は何なのだった？」

「ええい、知りませんわいつ。

あのような広範囲で射程が長く強力な、それも空中のレッド・ワ
イバーン八体を一瞬に。

あんな魔法は、聞いたこともないわ。
儀式もしておらん。

呪文を唱える様子もなかった。

いや、だ、第一あれはゴーレムじゃ！

なぜゴーレムが魔法を使えるのじゃ？」

「く、くそつ。

顔についた血糊が取れん！

あんな攻撃を、こちらに向けられたらっ」

「そ、そうじゃった。

魔術師第四分隊！

対魔法防御じゃっ。

詠唱を合わせよ！

ほかの魔術師分隊は、各個にゴーレムを攻撃するのじゃっ」

命令し終えるやいなや、ポルリカは、メテオ・ストライクの準備詠唱を開始した。

火系の最上位魔法であり、範囲殲滅魔法である。

火系の、それも最高の才能を持った魔法使いしか習得できない。一人よく一軍に伍することさえ可能にする、強大な魔術である。

「メテオ・ストライク！！」

発動詠唱とともに、巨大な彗星が、ゴーレムを直撃した。

大魔術師ポルリカの魔力の過半が込められた彗星の大きさは、圧巻である。

その威力は、兵士たちに勇気を、村人たちに絶望を与えずにはおかない。

魔術師たちは、これに鼓舞され、次々と攻撃魔法を放つ。

光弾が。

雷撃が。

氷の刃が。

石のハンマーが。

水の蛇が。

ありとあらゆる属性の破壊の秘術が、ゴーレムただ一人に殺到する。

どれほど魔術の乱舞が続いたか。

大方の魔法使いは魔力を使い果たし、攻撃は停止した。

辺りは、しんと静まりかえり、何の物音も聞こえない。

いや。

魔法の乱射により深くえぐり取られた大地のくぼみから。

何かが上がってきた。

ゴーレムである。

村人たちは、歓声を上げる。

ゴーレムは、軍勢に右手を向けた。

「く、来るぞつ。」

あの恐ろしい魔法攻撃だ！」

「ええいつ。」

うるたえなさるなつ。

対魔法障壁は、きちんと作動しておる。

この人数で張った障壁じゃ。

びくともするものではないわいつ」

ゴーレムは攻撃を撃ち出した。

それは、対魔術障壁などなかったかのように兵士たちを襲い、人と馬と木々と、そこから中のすべてを吹き飛ばした。

男爵軍の誰一人、立つこともできない。

戦いは、終わった。

そのとき、一人の伝令兵が、馬を駆って到着した。

「し、子爵様！」

事が露見いたしましたっ。

伯爵は、バルデモストのバヌースト侯より兵を借りて、わが本城を急襲。

敵は少数ながら、すさまじき手練れぞろいっ。

ご領主男爵閣下は討ち死に！

まもなく、ここにも敵が参ります！

子爵様、お逃げくださいませっ。

子爵様！」

16

あれ？

対魔法障壁を張ってる？

発動には魔力を使うけれど、攻撃自体は物理衝撃波だから、対魔法障壁は効かないよ？

と教えてあげたい気もしたが、あいにく私には口がなかった。

とにかく、ぎりぎりまで手加減して、衝撃波を撃つ。

よし。

全員吹っ飛んだな。

死者は出ていないはず。

たぶん。

これでもまだ戦いを続ける気なら、今度は殺すことにしよう。

それにしても、さっきのはメテオだったよな？

ずいぶんぬるい攻撃だ。

わが友モルトナのメテオを見せてやりたいものだ。
あれをくらくと目が覚めるぞ。

そう思いながら、私は振り返った。

湖と、大きな青白いドーム。

ドームの中の三人の姿が、私の目に映った。

少女の横にいるのは、リットだろうな。

後ろにデランがいる。

む？

この三人。

誰かに似ている。

三人が、この場所に、あんなふうに並んで立つ風景を、私は見たことがある。

そうだ！

思い出したぞ。

わが造物主と、奥方様と、わが友モルトナだ。

私たちは、ここに来た。

だが、あのときには。

私は、風景を画像として記憶し、湖部分を消去して、記憶領域に
検索をかけた。

編年による植相や地形の変化の蓋然性範囲を大きめに設定して。
ヒットした。

九十二パーセントの適合率だ。

そうだ。

私たちは、ここに来た。

みんな、ここがすっかり気に入ったが、あいにく奥方様と仲の悪い神霊が近くに来た。

それで、ここを離れることになったのだった。

奥方様は、この地に水の祝福をお与えになった。

やがてここには湖ができ、川が生まれ、森はさらに豊かになり、人の暮らしを支えるようになる、とおっしゃっていた。

造物主は、迷宮をお造りになった。

やがて湖の底に沈むべき迷宮を。

そして、こうおっしゃった。

「ヴォーグ。」

いつか私たちと離れることになったら、お前はここに来なさい。

この迷宮で、お前はエネルギーを補給できる。

この美しい場所で、静かに暮らしなさい。

そして近くに人の集落ができたなら、彼らの邪魔をすることなく、見守ってあげなさい」

そうだった。

あるじは、そのように仰せであった。

なぜ今まで思い出さなかったのだろうか。

ああ。

この碧あざみの水の底に。

あるじが私のためにあつらえてくださった迷宮がある。

ずっと私を待っていてくれた迷宮が。

私は、あれこれと昔のことを思い出していた。そのあいだに、軍勢はすっかり姿を消していた。もう、村を攻撃することは諦めてくれたらうか。そうであることを祈る。

さあ。

迷宮に行かなくては！

おっと。

その前に、左腕を回収しなくてはならない。

うっ。

入れない。

障壁の中に入れない。

うむ。

もちろんだ。

この障壁は、時間が来るまで、何ものも通さない。

中からも、外からも。

村人も、私も。

左腕が私のそばにあれば障壁を解除できるが、ちょっと遠すぎる。

左腕を回収するには障壁を解除しなくてはならず、障壁を解除するには左腕が要る。

うむ。

つまり、今は左腕を回収できない。論理的だ。

まあ、よかろう。

この次、私が地上に出てきたとき、回収するでしょう。
十年先になるか、百年先になるか、知らないが。

16

「リット!

デランさん!

見てっ。

神様が、石の魔神様が、湖の中に入っていく。

やっぱり、石の神様は、湖の神竜さまのお使いだったんだ。

あたしたちを守って、お役目を終えたから、神竜様の元に報告に
行くんだ!

神様ーっ。

石の神様ー!!!

ありがとうー。

ずっと、ずっと、守ってくれて、ありがとうー!

大好きだよーっ

村人たちは、地に伏して、ゴーレムに感謝の祈りを捧げた。

人々が見守るなか、ゴーレムは深みへ歩みを進めた。

その姿が水に没するまで、さほどの時間はかからなかった。

残照も消えて、夜のとばりが降りようとしている。

月と星々が優しい光を落として、さざ波を宝石のように輝かせる。

村人たちは、神々の恩寵に思いをはせながら、ずっと湖を見つめていた。

(5)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2032y/>

われはゴーレム 2

2011年11月19日14時31分発行